

いわき光洋 (福島)

「いわきは今日も元気です」
3投手中心の固い守りと積極的な走塁を
軸に展開する全員野球で、最後まで諦め
ず全力で戦い抜き元気と勇気を届ける。



いわき明星大学といわき公園を越えると見えてくる、広大な敷地の中にある大学のキャンパスのような近代的な建物はいわき光洋高等学校の校舎。その奥には公立高校のものとは思えないような広さの野球部専用グラウンドがある。その規模は広島市民球場（中堅115・8メートル、両翼91・4メートル）と同じ。

いわき光洋高校の野球部は昨秋の県大会は2回戦で日大東北に0-7と敗れる。そして震災の影響で中止になった春の県大会のあと行われた『いわき地区高校野球選手権大会』（6月8〜12日）では東日本国際大昌平や湯本など地域の強豪校を破り優勝を果たした。

実力者を中心とした全員野球

チームの戦術はバッテリーを中心に守りからリズムを作り攻撃に転じること。バッテリーを含め昨年公式戦に出場している選手が多く、経験値が高い。

足の速い選手が多く、チーム全体の走塁に対する意識が非常に高いため足を使った攻撃が得意だ。「常に先の塁を狙う走塁で相手にプレッシャーをかけ続ける。リード、スタープレーをしっかりとやっている」

フリー打撃ではカウントを決めケースを想定した打撃や走塁を、シートノックでは先の塁を奪う走塁や場面を想定した守りを一回一回丁寧にそして積極的に行っていた。

投手陣は右の本格派・遠藤選手、コントロールの良い渡辺啓選手、左の酒井選手と3人の投手がいる。

遠藤選手はMAX140キロ台、常時130キロ台後半の速球を投げる。スライダー、カットボール、チェンジアップ、カーブと球種も多く、それぞれのレベルが高い。この一年でコントロールが良くなり安定感が増した。身体能力が高く昨年の大会では1番を打った。今年の中軸としてチャンスに打てる打撃を目指す。

渡辺啓選手は140キロ超の速球と抜群のコントロールが持ち味。

酒井選手は左腕からの変化球を上手く使って相手を打ち取る技巧派投手。中学時代は全国大会にも出場した経験を持つ。

遠藤選手が先発として試合を作り、渡辺啓選手が抑え投手として試合を締める。そして酒井選手は相手チームのタイミングを外すための中継ぎ・ワンポイントとしての役割を担う。打撃で



右上 / ノックを打つ郷家監督。様々な場所・立場での経験を活かして選手を指導している。接する時間こそ短い、その知識を選手に伝わるように教え、選手達もそれを吸収している。

中上 / 練習中声を出す太田選手。チームのムードメーカーとして、練習中から一際大きな「意味のある」声を出しチームを勢い付ける。

左上 / シャドーピッチングをする遠藤選手。140キロ台の速球を投げる好投手。昨年は1番、今年の中軸を打つ抜群の野球センスで攻守にチームを引っ張る。

も3人は上位・中軸を打つ選手として最初から守備位置にすることが多い。そのため「クロスプレー」などでの怪我の心配やブルペンでしっかり調整出来ない」（郷家監督）ような不安はあるが小刻みな継投が可能だ。

力のある3投手をリードするのは昨年も公式戦に出場していた木下選手。身体能力の高さと捕手として抜群のセンスを持ち合わせ、監督が「捕手をやるために生まれてきたような選手」と絶賛する選手だ。相手をよく観察し、相手の逆を突き見逃がし三振を取れるリードをする。

「3人それぞれの特徴を活かすこと、継投になることを考え1試合全体を考えた配球をすることを心がけている」（木下選手）

2年生からバッテリーを組む遠藤選手は「よく相手を見ていて、その上で自分の得意球を理解して配球してくれる。彼のリードを信用し一球一球しっかり投げている」と信頼が厚い。

打線は昨夏の経験もある1番・酒井選手、中軸の遠藤選手・泉谷選手、渡辺啓選手を中心に投手さはないが、鍛えあげた足攻を絡め確実に得点を奪つ。

1年生の夏から公式戦に出場し、昨夏も4番を打った泉谷選手は「内野手が反応できない」程の強烈な打球を放つ。勝負強さも持ち合わせ、走者がいる時にどんな形でも良いので確実に走者を返すということを意識し

て打席に立つ。また「今までに比べ落ち着いて守りが出来るようになった。走塁も意識して行っている」というように打撃以外にもチームに貢献する。

2番の渡辺啓選手は遊撃手としてチームの守りのキーマン。バント・エンドランなど小技が上手く、足も速く、甘く入れば長打を打つ力もあり打線が機能するかどうかのカギを握る選手。主将としてチームを引っ張る存在でもある。

このようにチームの核となるのは上位・中軸・経験者達だが、監督・選手とも強調しているのは「全員野球」

試合では学年関係なく起用され、上下関係がほとんどなく選手達は皆仲が良い。ただ悪い所は遠慮なく指摘したり、お互いが良いライバル意識を持って日々切磋琢磨している。

チームを率いる郷家監督は高校野球の監督として8年、少年野球の監督を4年、部長・コーチとして計3年、他県や定時制での指導経験など様々な体験をしてきた。湯本高校をベスト4に導いた経験もある。

少年野球での「出来ない子に噛み砕いて教える」という指導法が今に活かされ、練習でも「なぜ出来ない？」ではなく「こいつは良いんじゃないの？」という声かけを意識している。



上 / プロ野球の球場並みの大きさの専用球場で練習する選手達。

県立高校とは思えない程の大きな球場。いわき光洋の選手達は、この球場で白球を追いかけ成長していく。

右 / いわき市小名浜の海岸。

いわきは魚の美味しい地域であり、それをあらわすかのようにキレイな海が広がっている。

放射能などの影響でここの魚を食べられるのはいつになるかは不明だ。しかし、それが出来るようになった時いわきは完全復興を成し遂げるのだろう。



震災後の4月から就任したいわき光洋の選手達は、野球に対して頭が良く、素直で順応性が高く指導したことをすぐに活かせる選手が多いという。

「元々力のある選手達が、一人ひとりがそれぞれ出来ることを考えて役割を果たせるようになり、当たり前前のを当たり前前に出来るようになった。選手個々としてもチーム全体としても日々成長している。」

郷家監督は外部からの監督で、少年野球や定時制での指導もしているため、練習を全て見られる訳ではない。しかし練習での選手達のモチベーションは高く、部長・コーチ・OBなどが練習をサポートしている。

そして180センチは超えるであろう、大柄がっちりした体格の選手が一際大きな声を出していた。チームのムードメーカーと言われている3年生の太田選手。

彼は6月の地区大会でヘッドスライディングをして手首を骨折。全治3カ月と診断され夏の大会は絶望となった。

その後落ち込んだ時期もあったが、仲間達が彼を励まし続け、「チームの雰囲気をよくするため」に自分が出れることをしようと切り替えた。

練習では、「今のプレーはこういう所がダメだ」「よし！ナイスポレーだ」とその場に合わせて声をかける。普段も一人だけでなく

部員全員とまんべんなく話をする、悩みを聞くなど様々な話をするように心がけているという。

その存在にチームメイト達は「彼が盛り上げてくれてチーム全体が乗っていける」監督は「練習試合をした相手チームの監督が『彼のような選手が欲しい』と評価していた」というようにチームに欠かせない存在になっている。

今年の3年生は彼のように控えても個性の強い選手が集まっている。そんな彼らが個性を發揮して全員で戦っていける。だからこそいわき光洋は『全員野球』なのだろう。

また今年の3年生は今の郷家監督を含め3人の監督の指導を受けている。ただ「高校で3人監督から指導を受けることは稀なことなので、3人の監督から学んだこと全てを夏の大会にぶつけた」と選手達はプラスに考えている。

頑張るいわきをアピールする

いわき光洋高校野球部は幸運なことにグラウンドも大きく崩れた所はなく、個人で被災をした選手はいるもののみならず無事だった。しかし放射能などの影響もあり1カ月ほどグラウンドを使用した練習は出来なかったという。

グラウンドでの練習を再開した日、選手達は「本当に幸せだった」「自分がこんなに野球が好きだということを実感した」と野球が出来る喜びを感じて満面の笑顔でグ



左上ノシート打撃、シートノックなどの待ち時間の間に裏でバットを振る選手達。ティー打撃、鏡の前での素振り、後ろから投げてもらってのティー打撃など練習方法は選手によって様々。課題克服のために僅かな時間も無駄にしない貪欲さが伺える。

右上ノシートノック時に走者として走塁練習をする選手。「相手にプレッシャーを与える走塁」を心がけるチームだけに、選手一人ひとりが特に真剣に行っていた。



部室内に飾ってある部の写真。

様々な思い出を写した写真からは、先輩の代から受け継がれるチーム全体の仲の良さが伺える。

特別な年となってしまった2011年。

仲の良い「最高の仲間達」と毎日遅くまで妥協せず練習を続けて迎えるこの夏の1ページはきっと部の伝統の1ページとなることだろう。

サウンドを駆け巡った。それとともに「野球が出来ることに対する感謝の気持ち」も芽生え、一日たりとも無駄にしてはいけないと、練習に対してのモチベーション・集中力が急激に上がってきた。郷家監督が言つ「順心性の高さ」も、彼らがそのような気持ちで練習に取り組んで来たからこそ感じられた部分ではなからうか？

今回の震災の影響で離ればなれとなり、避難先の他県の高校や県内の違う高校に転入しその部員として甲子園を目指す選手達もいた。彼らはそう言ったことがなく、ほとんどの選手が「最高の仲間達」と語る野球部の仲間達と甲子園を目指すことが出来る。そんな「当たり前」の喜びもきつと噛みしめているだろう。

彼らが優勝した『いわき地区高校野球選手権大会』は実は勝ち抜いた4試合全てが1点差ゲームという接戦だった。決勝の湯本戦は2点リードされた後半に逆転して勝利した。最後まで諦めずに常に全力で戦う。そんな姿勢が彼らを「いわき王者」に導いた。

いわき地区の代表として諦めずに最後まで戦い抜くこと、全力プレーを見せること、笑顔で楽しく野球をしている所を見せることによって「(いわき地区は)原発など大変なことがあったが、みんなが負けないで1日1日しっかり頑張ってきた」「いわきは今日も元気です」といったことを県大会、そして全国大会で彼らのプレー・試合を見る人にアピールしたい。

「全力疾走、感謝の気持ちなど色々な部分で自分達は日本一だと思えるチームを作れることを目標にしてきた。最後まで諦めない気持ち、全力プレーをアピールしたい。福島県代表で甲子園に行けば間違いなく注目される。出るだけでなく『福島県は、いわき地区は頑張っている』と思われるプレーを見せ勝ち進みたい。大好きな野球で自分達が出来ることのひとつとして、見ている人に勇気や元気を与えるプレーをしたい」

そんないわき光洋高等学校は初戦の本宮高校戦を5-0で勝利し、次戦は郡山北工との試合。球場は開成山野球場で7月17日の日曜日、9時試合開始予定となっている。